

鷗外『天保物語』論 (1)

——「護持院原の敵討」を中心に——

須田喜代次

はじめに

一八六八年の明治維新成就に先立つことおよそ三十年、一八三〇年から四四年にかけて続いた天保期は、「鎖国体制の最終段階」にあり、幕藩制解体過程の一階段（大口勇次郎「天保期の性格」、『岩波 日本歴史12 近世4』八岩波書店／所収）としてとらえることができる。またそれと関わって、「十九世紀三・四十年代の天保期の政治過程の中に、すでに明治維新の政治的原型の形成が始まっていたということが出来る」（遠山茂樹、『明治維新』八岩波書店／）という見方も存在する。とまれ、三十年後の幕府崩壊、維新到来を控えて、この時期は近世から近代へと時代が大きく流動・転換していく、その転換点にあたる時期であったということが出来るだろう。

樺山紘一氏は、特にその中でも天保三年前後から同十年頃にかけて全国を襲った「天保飢饉」を、当時の人々に「時代の転換」を実感せしめたものとして重視されている。

「天保飢饉直前までの平穩、あるいは見方をかえれば奢侈は、その直後からの混乱と窮乏に、突然うってかわられる。いまここで指摘すべきことは、民衆の生活がそのように現実に変化したということではない。（略）そのことよりはむしろ、天保の凶荒をひとつの時代のかわり目とみなし、もはや回復と奪回のゆるされない時代へと

移行してしまったという時代感覚なのである。」「かならずしも敏感でもなく、正確でもない天保人の感受性をもってしたとしても、天保飢饉という『重大事件』を手がかりとして、時代の転換が認識された。天保人は、その飢饉を出発点として、新しい歴史が、それも容易ではない不安な歴史が開始されたことに気づいた。」（飢饉からうまれる文化「天保飢饉の衝撃」）、林屋辰三郎編『幕末文化の研究』八岩波書店／所収）

こうした天保飢饉のあと、幕府はその態勢を立て直すべく、天保十二年から老中水野越前守を筆頭にして、いわゆる「天保の改革」に着手することになるのだが、それはわずか二年で効をあげることなく挫折してしまう。時の流れは、もはやそうした弥縫の策では押しとどめえないところまで来ている。そして二百数十年の長きに渡って維持され続けて来た徳川幕藩体制は、いよいよ崩壊の一途をたどることになるわけである。

それはともかく、いわばこの時代の転換点にあたる天保期、特にそれを実感せしめるきっかけとなったという天保飢饉、その真只中に発生した二つのでき事を、鷗外は自らの歴史小説の第四作、そして第五作目の作品の題材として取り上げることになる。それが大正二年十月発表の「護持院原の敵討」であり、翌三年一月発表の「大塩平八郎」だ。そしてこの二作品は、同大正三年の五月七日に、『天保物語』と

して一本にまとめられ、鳳鳴社より上梓される。

第一歴史小説集『意地』(大2・6)収録三作品において、幕藩体制確立期に着目した鵬外は、今、その解体の足音を響かせる時期に発生した二つのでき事に、そしてその中にうごめく人間模様の中に、何を見ようとするのだろうか。有名な自筆「意地広告文」(『三田文学』大3・10掲載)において「……其の時代の背景を描くのに於て……読者は必らず此の作に或る驚くべき新意を見出さん」とした彼は、わざわざ「天保」という時代を冠したこの二番目の歴史小説集において、どのようにその「時代の背景」を描きえたのか。あるいはえなかったのか。

わたくしは以下、作品集『天保物語』としてのまとまりを考慮に入れながら、集中の二作品をわたくしなりに読み進めて行くことにしたい。そしてここではまず、鵬外四作目の歴史小説「護持院原の敵討」(大2・9・20脱稿、10・5発行『ホトトギス』第17巻1号掲載)に対する考えをまとめることから始めたい。

一

作品世界はいきなり殺害の場面から幕が開く。^(註1)

時は天保四年十二月二十六日の早朝である。殺されるのは「当年十五歳になる、大金奉行山本三右衛門と云ふ老人」(傍点須田、以下同様)、そして彼をあやめるのが、金目当の押込み強盗を働いた「二十になるかならぬかの若者」(実際は二十歳であったことが後にわかる)通称亀蔵と呼ばれる表小使だ。

鵬外はこの二人を、作中でもう一度「痛手を負った老人の足は、壮年の癖者に及ばなかつたのである」とし、「老人」と「若者(壮年)」という対比でとらえている。もちろんそれは、五十五歳の三右衛門が老人であり、二十歳の亀蔵が若者であるという当り前のことをいっているにすぎないともいえるわけだが、しかし、天保四年(一八三三年)に二十歳であった亀蔵は、明治元年(一八六八年)にはこの時殺

された三右衛門の年令、すなわち五十五歳になるはずだという偶然の暗合は、やはり注目しておいてよいことなのではあるまいか。

そもそも本作品に登場する主要人物は、大きく二つの世代に分けることができるように思われる。つまり五十五歳の三右衛門、その弟で敵討の助太刀をする四十五歳の九郎右衛門^(註2)、そして忠実一途な四十二歳の仲間文吉、こうした世代を、今仮に八父の世代Ⅰ―九郎右衛門にも留守を任せる仲間蔵がいる―と呼ぶとするなら、二十歳の亀蔵や当年十九歳の宇平は八子の世代Ⅱということになる。もちろん二十二歳のりよも八子の世代Ⅲに入る。しかし彼女は女性である。後に見るように、この武家社会に於ての女性は、男性とは自らその位置を異にする。そして繰り返せば、この八子の世代Ⅲの若者が八父の世代Ⅰに到達する時、彼らが生きて来た基盤となる社会はすでになくなっていくことになるのである。そうした自己の生きる基盤となるべきものがぐらつく「時」を、これらの若者は生きねばならないのだ。

こうした様は、たとえば「意志の堅固な、機嫌に浮沈のない叔父」と「不断から機嫌の変り易い宇平」といった対比にも端的に表われているのではあるまいか。それは個々人の個性の違いにだけ帰せられるべきものではおそらくない。そこに「世代の個性」を見ることも許されるのではないか。確固たる信念を持ちえた、否それを疑いなく信じえた世代と、そうした前の世代から受け継いだものを自分のものとして全面的に信じていることができる(と)いって、それに変るべきものもいまだ確立しえない)世代、本作品は、そうした八父の世代Ⅳ、八子の世代Ⅴそれぞれの生き様を、「敵討」という「武家時代の特異の風習」^(註3)を媒介に、転換の時代相の中に描いてみせているということができるのではあるまいか。

その八父の世代Ⅴを支えていた倫理は何か。それは、三右衛門の遺言に端的にうかがうことができる。

三右衛門はいう。

「家督相続の事を宜しく頼む。敵を討つてくれるやうに、伴に言つ

て貰ひたい」と。

これが父から子へ手渡されたバトンだ。

『家』は家族の全体性を意味する。(略)特に『家』の本質的特徴をなすものは、この全体性が歴史的に把握せられているという点である。現在の家族はこの歴史的な『家』を担っているのであり、従って過去未来にわたる『家』の全体性に対し責任を負わねばならぬ。『家名』は家長をも犠牲にし得る。」

と書いたのは和辻哲郎氏だが、『風土』、その『家』に伴う全責任が、今、十九歳の青年当主宇平の肩にかかったことになる。

すでに早く唐木順三氏によって「宇平が、この課題の、のつびきならぬ背負手である。(略)宇平の姉りよは、女であるから直接の負荷者ではない」(『鵬外の精神』)という指摘があるが、「何卒此恨ミ二子も有之候間為晴被下候様井家名相統之事迄委細ニ相願候」という原典の叙述を、鵬外が「敵を討つてくれるやうに、伴に言つて貰ひたい」として、明確に敵討の責任を家長たる宇平に負わせたことはやはり注意しておくべきだろう。過去から未来に渡る「家」の全体性、その長い歴史の一齣に彼はこの時取り込まれる。「家名」が彼の生き様を縛ることになる。そして宇平という一青年は「侍が親を殺害せられた場合には、敵討をしなくてはならない」という武家社会の暗黙の定め、その「共同規範」に則って、行くべき方向を定められたことになるのである。ましてや彼の場合、「その敵討が故人の遺言になつてゐる」のだ。宇平は山本家存続のために、彼がそこに生きる基盤を置くところの武家社会が共同規範として敷いたルールを、否応なくたどらねばならない。

二

△子の世代▽宇平が表向敵討の願を提出し、上からの許可を待っている間に、△父の世代▽たる九郎右衛門は早速敵討の用意万端整えて江戸にやって来る。

作中、彼の主人本多意気揚について、「徳川家康が酒井家に付けた意気揚の子孫で、武士道に心入の深い人なので、すぐに九郎右衛門の願を聞き届けた」という叙述があるが、「兄の訃音を得」るや「すぐに主人意気揚に願書を出した」この九郎右衛門もまた主人に劣らず武士道に心入の深い人物であるといえよう。

真先に敵討の行動を開始した彼は、実際目的遂行のためにはどんな困難にもめげない。仇討道中でわずらった足痛を癒すために郷里で静養することになった時も「本意を遂げるまでは、飽くまでも旅中の心得でゐて、伴の宅には帰ら」ない。武士でありながら自ら按摩をして路銀を稼ぐことも辞さない。発熱した讒言にまで「こら待て」だの「逃がすものか」だのと叫ぶほどである。まさに武士道を地で行っている人物なのだ。

時代は侍集団を統率すべき奉行ですらが、いとも簡単に落馬してしまふ時代である。すわ、一大事ということで鎧櫃を担ぎ出せば、鎧のかわりに鍋釜が入っている時代である(『大塩平八郎』)。そうした時代に、この九郎右衛門という一人の侍を置いてみるならば、彼はあるいは「遅れて来た人間」といえるかもしれない。ちょうど元龜天正期の武士としての面影を強く残す柄本又七郎が、寛永期の社会にあって「遅れて来た人間」であつたように。それほど九郎右衛門は典型的な武士道精神を体現している人物として描かれている。そして、このように一貫した自己の信念に基づいて精一杯日々を生き抜く人物を、鵬外の目は好意的にとらえている。

それにしても、その九郎右衛門が、「眉間に皺を寄せ」て「大きい車は廻りが遅いのう」という如く、彼らをとりまく社会の機構は仰々しい。

たとえば三右衛門襲撃の時すらがそうである。鵬外はその時の模様をこう書いている。

「物音を聞き付けて、最初に駆け付けたのは、泊番の徒目付であつた。次いで目付が来る。大目付が来る。本締が来る。」

できあがっているピラミッド型の秩序体系が目に見えるようである。

やがて三右衛門を浜町添邸の神戸某方で引き取るよう沙汰せられる。引き取られた翌日の二十七日、三右衛門は絶命する。

「其日の酉の下刻に、上邸から見分に来た。徒目付・小人目付等に、手付が付いて来たのである。」

「形式に絡まれた役人生涯」とは「大塩平八郎」中のことばだが、こうした叙述を見るならば、まさに彼らの生息する武家社会が形式に絡まれた社会である様を読み取ることができるのではないだろうか。これでは「廻りが遅い」はずなのだ。

さらにこうある。

「役人の復命に依つて、酒井家から沙汰があつた。三右衛門が重手を負ひながら、癲者を中の口まで追つて出たのは、『平生の心得方宜に付、格式相当の葬儀可取行』と云ふのである。」

死んでも彼らは武家社会の約束事から自由ではない。個人的な死の儀式すらも、上からの沙汰を経たものでなければならぬ。しかもそれは「格式相当」のものでなければならぬ。

ここに個人の自由意志を発揮すべき余地はない。「勝手にする」ことなど全く不可能な社会だ。

こうした、形式に絡まれ、二重にも三重にも束縛され身動きのできなくなっている社会、それが徳川二百数十年の武家社会が築きあげた秩序、「成立してある秩序」（「大塩平八郎」）なのである。しかし、そうした秩序体系の中身がこの時すでにどういう状態であったのかを、わたくしたちは次作「大塩平八郎」における奉行所内や大阪城内の混乱の中にじっくりと見ることになる。

だから、九郎右衛門の先のことは、彼らを取りまく社会のよどんだ澱を的確にいいあてたことばに他ならない。すなわち形式だけは立派に整っているものの、すでにその内実がそれに伴わない状況だ。それを内面・外面の合致している、一貫した武士道の体得者、九郎右

衛門という、いわば一時代前の武士をして、鵬外は鋭く指摘する。

三

こうした窮屈な秩序の支配する武家社会にあって、「当時の庶民らしい庶民」（西尾実『研究 鵬外の歴史小説』文吉や、「女性であることによつて」「家や社会に張りめぐらされている義務と期待の網の目から自由な存在たりえた」（畑有三、「護持院原の敵討」『国文学』昭48・8）りは、その社会の直接の参画者でないだけに、宇平や九郎右衛門に比してその自由さが目につく。

「三右衛門には世話になつたこともあるので」「敵の見識人として付いて行つても好い」という自発的な申し出により無給で献身的に敵討の伴をする仲間文吉に関しては、しかし次のような見方が存在する。

「しかし、その無償の行為は、彼の心情の一面でもあらうが、それだけでもないのではないか。渡者の仲間、そのころ失職していた文吉は、山本家の家来になることで、一応の職につけること、さらに敵討の終わったあとで、多少地位の向上もあたえられるという期待もあったのではないか。」（沢川龍、筑摩叢書25『森鵬外 作家と作品』△筑摩書房△）

右の沢川氏の指摘を受けて、板垣公一氏もまた「渡り仲間であつた文吉の、就職運動として敵討参加を考へることも基本的に正しいであらう」（『護持院原の敵討』論—宇平の評価を基点として—、初出『潮流』12号、昭50・5、『森鵬外 その歴史小説の世界』△中目文化△所収）とされている。さらに「沢川氏が（略）といわれるように、経済的理由が確かにあつたと思われる。だがそれに尽きるのではなく、一種の生き甲斐を求めての参加ということも、考慮すべきではなからうか」という別の観点を付加されたのが畑有三氏だ（前掲論文）。

また、蒲生秀郎氏は、原資料『山本復讐記』の記述との比較に立つて、「資料の中の文吉は、（略）ひかえめな、へりくだった形で同行を申し入れたのではなかった。もっと積極的に、（略）いわば自分を

売り込むように同行を申し込んできた人物なのだ」とされ、「この時文吉の期待の中に、この敵討の成功によって開けるであろう自分の運命が見えていなかったと考えるのは、かえって不自然というものだ」と指摘された（『鷗外の歴史小説・その限界の一面―『護持院原の敵討』における文吉の造型―』『文学』昭53・5）。

このことについて考えてみたい。

蒲生氏が分析されたように、原資料からうかがえる文吉には、確かに自己の運命を切り開くための敵討参加といった面影がないとはいえない^{（注6）}。したがって実際の文吉に、渋川氏以来指摘される就職運動云々といった点を見て取ることはできるかも知れない。しかしながら、この鷗外作品に形象化された文吉像に關していうならば、彼の行動の裏にそうした思いを読み取ることは、わたくしはできないと思う。

たとえば、九郎右衛門と宇平とが文吉に暇を遣ろうとする時の文吉のただたどしいことばの中には、欲も得も離れた、人間の純粋な思いが込められているといいいい。それは彼の行動が、一庶民の、つまり武士的倫理にからめとられない一個人の、内面から発する無償の行為以外の何物でもないことを物語っている。鷗外は、原典にはない、右のエピソードをわざわざつけ加えることによって、文吉という人物を、習って得るのではない、人間としての原初的美徳を備えた人物として形象しようとしているのだ。本作品と時を接して発表された「鏝一下」（大2・7『中央公論』）の文言にならえば、鷗外は、何の報酬も求めず文字通り身命を賭して、一個の人間として、敵討に参加するという文吉の「其事ではなく其人」に感動しているのではあるまいか。

長谷川伸は、その著『日本敵討異相』における巻末「著者のことば」において、「『敵討』三百七十件ばかりの中から、異質なものと云ったのは、人間と人間とがやった事を指しています。それは現在の人間と人間とがやっている事と、共通していたり相似であったりだと言ふことです。そうして又、現代人が失った清冽なものだつてあります」と書いているが、歴史の中に埋もれてしまうような一庶民の中

に、鷗外は人間としての崇高さ、現代人にはあるいは失われてしまっているような「清冽さ」を見て取り、それを掬いあげようとしているのだ。

ただ、こうした文吉が、敵討成就の後に、小役人に召し抱えられ深中とその苗字を名のる時、つまり武家社会にその一成員として参画する時どうなるか、これは最終章の読みとも関わるのだが、十分に注意しておかねばならないことだと思われる。

一方りよはどうか。

西尾実氏に「この小説の『本尊』はりよである」（前掲書）という指摘があるが、そもそもこの天保六年七月、神田橋外元護持院二番原で行われた敵討事件が、事件当初から人々に喧伝されたのは、敵討の当事者が山本りよという若い女性であったことに負っている。それは、この敵討成就を祝して寄せられた和歌や発句の類のうち、「山本氏之女、父の仇をむくひ侍しを祝ひて」とか「りよ女の勇孝を祝して」といった詞書を持つものが圧倒的に多いことからもうかがえる。小説ならぬ本件敵討事件の「本尊」がりよであることはまちがいない。

それでは小説中のりよはどのように描かれているのだろうか。

先にも見たように、「女性」であるりよには、敵討の直接の責任はない。「武家社会の約束ごとには『女』は入ってこない」（山崎一穎、『護持院原の敵討』考）初出『評言と構想』第10輯、昭52・7、『森鷗外・歴史小説研究』八校編社／所収）からだ。この社会にあっては女に生まれたのはそれだけで「不肖」ということになる。

だが、しかし、本作品執筆後程へずして執筆した「ノラ解題」（大2・11、『スバル』）の中で、イブセン「人形の家」の主人公「ノラ」を、「習って得る道義心は一も発展してゐない。これに反して属類の上の自然の道義心、性欲の根本に氣脈を通じてゐる道義心は完備してゐる」とした鷗外は、りよを、武家社会の共同規範にとらわれない立場から、敵討に主体的に関わる人物として形象している。

彼女は本来宇平が持つべき父のかたみの脇差を「切に請うて」譲り受ける。敵討の願書に自分の名を書き入れることを「きつと居直つて要求」する。こうした彼女の主体性は、彼女の行動が何物かに強制されたものではなく、彼女自身の内面からの自然の発動であることを思わせる。彼女には「敵討」という目的以外のものは見えていないかのようにある。そして女性の身でありながら、当然のように敵討の旅に出る準備をする。武士道の体現者九郎右衛門は、これまた当然のことながら彼女の同道を許すことはできない。

「そいつは駄目だ。お前のやうな可哀らしい女の子を連れて、どこまで往くか分からん旅が出来るものか」

これが武家社会の「道義」である。しかし、りよはいとも簡単にそれを否定する。

「『仰やる通、どこでお逢になるか知れませんが、きつと江戸へお知らせになることが出来ませうか。それに江戸から参るのを、きつとお待になることが出来ませうか。』罪のないやうな、狡猾らしいやうな、くり／＼した目で、微笑を帯びて、叔父の顔をぢつと見た。」

この「罪のないやうな、狡猾らしいやうな、くり／＼した目」は、彼女の行動が、習って得るのではない「自然の道義心」に基づいているものであることを思わせる。「併し女子は青年や芸術家のやうに、無意識にして正鵠を得る、天才的本能を有してゐる」(「ノラ解題」ということばも思い合わせられる。「正鵠を得」ているだけに、この「自然の道義心」の前に、武家社会の「道義」の中で立派な武士として生きる九郎右衛門も、さすがに「少からず狼狽」せざるをえない。これは仇討同道をしどろもどろながら主張する真摯な文吉のことばに「詞の返しやうがなかつた」場面に酷似する。

また彼女は、「万一間に合はぬ事があつたら、……諦めてくれるより外ない」という叔父のことばに対して「それ御覧遊ばせ。わたくしはどうしてもその万一の事のないやうにいたしたうございます」と答

えているわけだが、これは、りよが、たとえば「大きくなつてからでなくては、遠い旅が出来ないと云ふのは、それは当り前の事よ。わたし達はその出来ない事がしたいのだわ」と囁く安寿や、「ああ、さうしよう。きつと出来るわ」と一人ごついちにきわめて近い存在であることをうかがわしめる。清田文武氏の指摘された彼女の瞳の描写をも含めて、やはりりよは、後に続く鷗外歴史小説の女性像の系譜に連なる人物であるといえよう。

そして本作品発表の五カ月前、『スバル』に連載中の「雁」(金)「貳拾壹」章の中で、鷗外が「(女へ)既に決心したとなると、男のやうに左顧右眊しないで、oeillets(オイユエ)を装はれた馬のやうに、向うばかり見て猛進するものである。思慮のある男には疑懼を懷かしむる程の障礙物が前途に横はつてゐても、女はそれを屑ともしない。それでどうかすると男の敢てせぬ事を敢てして、おもひの外に成功することもある」と書いたごとく、主体的に敵討に関わり続けたりよは、一年半後見事その本懐を遂げることになる。

こうして鷗外は、りよという一女性を通じ人間の内にある、習って得るのではない自然の道義心の発露が、一つの成功する結果を生み出す様を描いたのだった。

武家社会の「道義」・共同規範から自由な文吉・りよは、そのことによつて、その人間性の十分な発露を妨げられない。

そして、だからこそ、先程の指摘を繰り返すことになるのだが、わたくしには最終章の敵討成就の後日譚が気にかかるのだ。

四

一気に最終章の問題に行く前に、作品の叙述をもう少し追って行くことにしよう。

天保五年二月二十六日、待ちに待った敵討の許可がおりる。

江戸に残るりよを除いて、宇平、九郎右衛門、そして新に家来となつた文吉の三人は、二十九日朝いよ／＼敵討の旅に立つ。高崎から始

めて全国各地をめぐる彼らの長い敵探索行を、鵜外は原典『山本復讐記』の叙述に即して、そのままなんねんに跡づけている。それは、まさに尾形仇氏が「こうした鵜外のやりかたは、美德のヴェールに包まれた敵討の実態をきわやかに復原すると同時に、読者をしてうんざりするようなやりきれぬ思いに誘いこむ」(『護持院原の敵討―その時代性について―』初出『国語と国文学』昭40・6、『森鵜外の歴史小説 史料と方法』△筑摩書房△所収)とされた通りだ。

彼らの四国探索行が失敗に帰した時、鵜外は「四国の旅は空しく過ぎたのである」と書いたのだが、まさしく彼らの探索行は空しい。だいいち、住所不定の無頼漢亀蔵を捜すこと自体、すでに「米倉の中の米粒一つを捜すやうな」漠たるものである。それなのに、あろうことか、その情報に一喜一憂しためざす当の敵亀蔵が、実は亀蔵という名ではなく虎蔵という男だったということが敵討の最後になって初めてわかることになる。とするならば、一年有余にも及ぶ彼らの「亀蔵」探索行は最初から関係のない的を目標けて矢を射ていたようなことにもなり、それは、まったく空しさを通り越して滑稽ですらあるといえるのではあるまいか。

鵜外はこうした事実を、何らそこに自己の解説や解釈をつけ加えることなく、原資料の語りに忠実に再現する。事実を事実として語らしている。そしてこうした事実の積み重ねの中に、わたくしたち読者は、敵討という「武家時代の特異の風習」の空しさ、その徒労性を、実感として追体験することになるのだ。また敵討当事者にとってみれば生死を賭けた真剣な営みが、第三者からみればきわめて空しい、見方によれば滑稽ですらあるという人生のアイロニーをも巧まずしてそこに現出している。鵜外歴史小説の持つリアリティは、まさにこうしたところにこそ求められるといえるであろう。

したがって、こうした敵探索行の中から宇平が発して来る疑問や主張は、その読みに関しては以下見るように諸説分れるところではあるのだけれども、彼がそうした疑問を持ち主張を発するという、そのこ

と自体に関しては、ごく順当な自然なものとして受けとめることができるのではないだろうか。

五

その宇平のことばは次のようなものだった。

彼はまず「をぢさん。あなたはいつ敵に逢へると思つてゐますか」と問いかける。そして「わたしはかうして僥倖を当にしていつまでも待つのが厭になりました」という。前述したように、彼らの空しい日々の積み重ねを読んで来ている読者には、この宇平の気持ちとはそれとして理解不可能なものではないはずだ。

さらに彼が「をぢさん。あなたはどうしてそんな平気な様子をしてゐられるのです」と問うのに対して、九郎右衛門はこう答える。

「さうか。さう思ふのか。よく聴けよ。それは武運が拙くて、神にも仏にも見放されたら、お前の云ふ通だらう。人間はさうしたものではない。腰が起てば歩いて捜す。病気になるれば寝てゐて待つ。神仏の加護があれば敵にはいつか逢はれる。(略)」

武士道の体現者、確固たる信念の持ち主、九郎右衛門はここにも生きてゐる。彼は少しも揺れていない。しかし、宇平にはそれを自分のものとすることはできない。△父の世代△の信念は△子の世代△には受け継がれない。

「をぢさん。あなたは神や仏が本当に助けてくれるのだと思つてゐますか」として九郎右衛門に「一種の気味悪さ」を感じしめた彼は、

「さうでせう。神仏は分からぬものです。実はわたしはもう今までにしたやうな事を罷めて、わたしの勝手にしようかと思つてゐます。」

という一言を残し、亀蔵に会おうまではあいつの事なんか考えないとして、この敵討行から離脱して行く。

こうした宇平の言動に関しては、従来さまざまな観点から論じられ

て来ている。

これを「いうところは理に合っている。が、敵さがしに根がついたものの理屈である」(西尾実、前掲書)としてしまえば話は簡単になる。しかし「いうところは理に合っている」だけに、そうたやすく一蹴することはできない。

この「現代の読者の納得しやすい一種の合理性」(蒲生秀郎、「鷗外の歴史小説・その明暗の構造——『護持院原の敵討』をめぐる——」『文学』昭52・1)を備えている宇平のことにば「近代人」の面影を見た嘴矢は斎藤茂吉だ。以来宇平に「近代人」を見る見方は一般的になっているといっている。たとえば、岩上順一氏は「彼はいはば来るべき維新の時代、即ち合理性の時代の、最初の子であつた」(『歴史文学論』八中央公論社)といい、西尾実氏は宇平の性情・思想には「大正初年の青年を思わせるものがある」(前掲書)という。生松敏三氏は、彼を「近代人的センチビリティの持主」とし、彼の抱く懷疑を「近代人的懷疑」(『森鷗外 近代日本の思想家』八東京大学出版会)といい、山崎一穎氏はまた、宇平は「近代人の精神の虚弱の象徴として造型されている」(前掲論文)という。

こうした、宇平に「近代人」を見る見方に対して、菊池昌典氏は異を唱える。

「宇平の行為を、斎藤茂吉のように『近代人』に似かよう状態になってきたと解釈するのは、私には不満でならない。天保時代の武士脱落者の心情は、『近代人』のそれとは異相の次元にあるのだ。宇平は、仇討のナンセンスを感じとったのではなくて、天保の時代相にただついていくことができなかったからにすぎない」(『歴史小説とは何か』八筑摩書房)

菊池氏がここで指摘されるように、宇平を「天保時代の武士脱落者」と見る視点は重要であるとわたくしは考える。安易に大正現代の青年の心情に宇平のそれを重ねることは慎まねばならない。ただ氏が、宇平を「天保の時代相」について行くことができなかったとする

のはどうか。氏にはまた「宇平のような者は、封建時代の武士として不適格者であつたにすぎないのだ」という指摘があるが、「封建時代の武士として不適格者」である青年武士が登場するというこそ、まぎれもなく「天保の時代相」そのものではないだろうか。

すでに先学の指摘があるように、宇平は敵討自体をやめようというのではない。彼は「晴がましい敵討」を抛棄しようというのだ。つまり、武家社会がその共同規範として敷いたルールをたどることを、彼はやめようとするのだ。その原因は何かといえは「僥倖を当にしていつまでも待つのが厭にな」ったからだ。「わたしの勝手にしようと思」うからだ。彼はこうして自己の内面の思いを貫き通そうとするのである。それ以上でもなければそれ以下でもない。だから、ここに敵討制度批判や家父長制の批判までを読み取ることができない。山崎氏の指摘されるごとく、鷗外は、宇平をして「敵討の内実を正面から批判させ」たりはしていない。^(註11) そうした問題に宇平の目は向いていない。彼は、あくまで個人の意志を、周囲の暗黙の共通の意志の要請を蹴って、押し通そうとするだけだ。わがままといえはわがままである。

前述したように、彼は本来自分の「勝手」にできる立場の男ではない。彼は、過去から現在、そして未来へと連なる「家」の全体性、その長い歴史の一歯車として位置づけられている男にほかならぬ。そうした男にふさわしく、もともと宇平は、姉のりよに比しても、主体的な生き方をする青年とは描かれていなかった。「色の蒼い、瘡せた、骨細の若者」で「不断から機嫌の変り易い」男、そして「常はおとなしい性である。それにどこか世馴れぬぼんやりした所がある」という「若殿」と綿名されるこの青年は、どこか頼りない。叔父に指示された敵討の仕度も、姉任せのようである。四国路探索を先にするか後にするかとの問題があつた時も、「詰まりは意志の堅固な、機嫌に浮沈のない叔父に威圧せられて、付いて歩」く宇平である。路銀が尽きそうになった時も、叔父は按摩に、文吉は淡島の神主になったようなの

に、彼だけは何かをしたという形跡がない。そうした「若殿」宇平が、この時、叔父に一步もひけをとらずに自己を主張する。

いうまでもなく、このように自己を前面に押し出して主張すること、そして自己の思いのままに「勝手」にすること、こうしたことは、「成立してゐる秩序」体系内にあっては許されるべきことではもうとうない。「封建時代の武士として不適格者」であることはもちろんである。しかし、この新青年の、自己の「私」を発想の核とする主張を、「成立してゐる秩序」側の論理は押さえることができない。もはや「おい、待て」という叔父のことばに「威圧せられて」従う宇平ではない。彼は自らの意志に従って強制されない「生」を初めて歩み出さんとする。

そうしたことから、この時の宇平の行動を武士社会から「みずからの意志で、そこを抜け出したのだ」(傍点原文)とし、「彼はもはや脱落者ではない。敗北者ではない」(前掲「鵬外の歴史小説・その明暗の構造」と把握される蒲生氏の意見にわたくしは肯かされる。

しかしながら、氏が、宇平の「嘲るやうな微笑」や「恬然」たる態度に、あの山口節蔵に似通うものを見、節蔵の「肯定即迷妄」の目をこの時の宇平に見ようとするのはどうか。氏はそこに「鵬外自身の想念、その内なるものの発露」を見ようとするのだが、この時の宇平の言動に、はたしてそれほど「強烈なニヒリズム」を感じることが出来るだろうか。

氏が注意された「嘲るやうな微笑」を閃かせたあと、宇平はさらにもう一度「軽く微笑」む。しかしそれは

『ふん。そんなら敵討は罷にするのか。』

宇平は軽く微笑んだ。おこったことのない叔父をおこらせたのに満足したらしい。

というものだ。おこったことのない叔父をおこらせて満足するような宇平である。むしろ子供っぽいといえりるほど単純・素朴な宇平なのではないか。

とすれば、彼の面貌に浮かぶ「嘲るやうな微笑」も『物に動ぜぬ』はずの叔父の激昂を『恬然として』受け流すほどの、ふてぶてしい『微笑』(蒲生氏)であるよりも、これは、あの敵討行について行こうとしたりよが、それを拒む叔父との問答の中で見せた「罪のないやうな、狡猾らしいやうな、くり／＼した目で、微笑を帯びて、叔父の顔をちっと見た」表情に近いのではあるまいか。「何か言ひ出しうにして又黙つ」たり「云ひ掛けて」黙ってしまったりする宇平にふてぶてしさは感じられない。

彼は自己心中に湧き出た思いに、素直に従ったままだ。十九歳にして、突如外側から規定された生を生きねばならなかった青年が、背のびをやめて、自己の内面の自然な思いのままに、強制された生ではなく、自分自身の生を選び取ろうとしているのだ。そうした自己の自然な思いを素直に語る時、彼は「無意識にして正鵠を得る」(「ノラ解題」)ことにもなる。ここに彼の新しさがあるといえるだろう。

「小説は九郎右衛門の価値観と宇平のそれとを対比させ、止揚する形で構成されてはいない。対置させたまま放置されている。」

とされるのは山崎一穎氏(前掲論文)だが、この二人の価値観が止揚される形は、おそらくはありえない。そして、こうした二つの価値観が止揚されることなく並立して存在する時代相、それこそが、天保という転換の時代相を明確に物語っているように思われるのである。

こうして武家社会の共同規範が敷いたレールから降りた宇平は、武家社会を描く作品世界からは当然のように消えて行かねばならない。そして作品は、宇平の否定した「晴がましい敵討」の成就を語ることになる。

六

天保六年七月十三日、あたかも盂蘭盆会の夜、九郎右衛門、文吉の主従は、ついに目ざす敵「亀蔵」を、両国花火の混雑の中に発見し、神田橋外元護持院二番原においてとらえることに成功する。そして、

文吉の案内で駆けついたり、よともども三人で亀蔵（実は虎蔵）を取り囲み、見事その本懐を遂げることになる。

「縄をほどかれて、しよんぼり立つてゐた虎蔵が、ひよいと物をねらふ獣のやうに体を前屈にしたかと思ふと、突然りよに飛び掛かつて、押し倒して逃げようとした。

其時りよは一步下がって、柄を握つてゐた短刀で、抜打に虎蔵を切つた。右の肩尖から乳へ掛けて切り下げたのである。虎蔵はよろけた。りよは二太刀三太刀切つた。虎蔵は倒れた。

『見事ぢや。とどめは己が刺す。』九郎右衛門は乗り掛かつて吭を刺した。

九郎右衛門は刀の血を虎蔵の袖で拭いた。そしてりよにも脇差を拭かせた。」

これが彼らの敵討の幕切れである。この時の虎蔵は「衣類は木綿単物、博多帯、持物は浅葱手拭一筋」といういでたちである。「縄をほどかれて、しよんぼり立つてゐる虎蔵や「わたしもこれまでだ。……どうぞ御存分になすつて下さい」という虎蔵に極悪人のイメージはない。むしろ卑弱な若者という感すらある。その手拭一つの若者を、三人は取り囲み、少しの情もなく打ち果たす。彼の死骸に残されていた創は、全身に「都合七箇所」とある。「押し倒して逃げようとした」虎蔵を、りよは極めて冷静に「一步下がって」抜打に切っている。彼女にためらいは微塵もない。「敵討」とはいつでも殺人であるには違いない。それが平然と実行される。そして打ち果たした当の敵虎蔵の袖で、刀の血をぬぐう。むごいといえはむごい。そうした様を鵬外は感情を押さえた冷徹な筆致で、淡々と綴っている。そしてこの非情さの中にこそ、わたくしたちは、天保期がまだまだきれいな武士家社会であることを実感せしめられるのだ。

以下作品は、翌天保六年七月十四日以降の敵討事件後の顛末に筆が費やされる。

この後日譚に関して、山崎発子氏は「この部分に創作が加えられず史実の紹介に終わっているのは、この部分が史実通りであろうとなかろうと、鵬外の描かんとしたものゝ本質には変化を来さないからではなかろうか」（『護持院原の敵討』に就いて）『文学・語学』第4号、昭32・7）とされた。また荒川有史氏は、「最終章では、敵討の跡始末が詳細に記述されている。が、その詳細がかえってそれまでの緊張感をこねる結果になっている。『阿部一族』の一貫した緊張感あふれる文体とは違う」（『護持院原の敵討』の総合読み『文学と教育』No.106、79・5）とし、この部分を作品上のマイナス点とされている。

この、一見「完全に小説的興趣を離れて、さながら公文書の綴りでも細くがごとく観がある」（尾形功、前掲論文）敵討後日譚は、しかし、わたくしには、本作品を読み取る上での一つの重要な重みを荷う部分であると思われる。いささか煩瑣ではあるが、この敵討後日譚の中身を見て行くことにしたい。

敵討を果たした九郎右衛門ら三人は、本多伊予守頭取の辻番所に届け出る。聞き取った辻番人は「辻番組合月番西丸御小納戸鵬殿吉之丞の家来玉来勝三郎組合」の辻番人である。一人の辻番人がこれだけの規定を受けねばならない社会が、彼ら三人を待ち受けている社会である。そして知らせは「本多から大目付に」「辻番所組合遠藤但馬守風統から酒井忠学の留守居へ」というルートで伝えられる。やがて「酒井家から役人が来て、三人の口書を取つて忠学に復命」する。こうしてあの「成立してゐる秩序」の側が、彼らを取り込み始める。当日酉の下刻に彼らを取り調べたものは「西丸徒士目付永井亀次郎、久保田英次郎、西丸小目付平岡唯八郎、井上又八、使之者志母谷金左衛門、伊丹長次郎、黒鉄之者四人」という仰々しさだ。さらにこれに「本多家、遠藤家、平岡家、鵬殿家の出役」が加わる。たかが無頼漢一人討ち取った敵討に、これだけ大相に「秩序」側の機構が動くのは、それが、彼らの生きる武家社会の共同規範に則ったものであるからだ。それは当然武家社会の共同規範の中で処理されて行かねばなら

ない。「見分が済んで、鵜殿吉之丞から西丸目付松本助之丞へ、酒井家留守居庄野慈父右衛門から酒井家目付へ、酒井家から用番大久保加賀守忠実へ届け」られるゆえである。

翌十五日からは、町奉行筒井伊賀守政憲の三人に対する取り調べが開始される。彼らは二十八日まで、「口書を出した」、「口書下書を読み聞せられ」た、「口書清書に実印、爪印をさせられた」というような件で、都合五回に渡る呼出しを受けた後、初めて全員「構なし」ということになる。

彼らの敵探索行の描写に共通するような、こうしたうんざりするような煩雑さは、彼らの生きる社会が、形式にがんじがらめに絡まれた社会であることを改めて思わせる。これが「成立してゐる秩序」の実態なのだ。

そして注意すべきことは、こうした「秩序」形態を叙す最終章に入ると、もはや九郎右衛門も、そして文吉も、その作品の表面から姿を消してしまうということである。

もちろん彼らがどうなったかという、結果はわかる。九郎右衛門は、主人本多意気揚から百石をもらい、用人の上席にされるわけだし、りよは「女性なれば別して御賞美あり、三右衛門の家名相統被仰付、宛行十四人扶持被下置、追て相応の者婿養子可被仰付」ということになる。さらに文吉はまた、「格段骨折奇特に付、小役人格に被召抱、御宛行金四両二人扶持被下置」とされ、苗字を深中と名のつて、酒井家の下邸巢鴨の山番を勤めることになるのだ。しかし、わかるのはそうした彼らの処遇だけだ。顛末だけだ。ここでは彼らはもう一言もしやべらない。どんな面貌をしているか、それもわからない。

「三人の献身者は、『敵討』に賭けた八意地』によって『秩序』を超えるどころか、結局はいつそう強くその中に組み込まれてしまったのである」(『日本近代文学大系』¹² 森鷗外集Ⅱ『八角川書店』解説)とされたのは重松泰雄氏だが、確かにここにはあの質実剛健を地で行くような九郎右衛門も、あの主体的な女性りよも、忠実この上ない文吉もい

ない。彼らは、彼らを包み込む大きな力の前にその個性を埋没させられてしまっている。

かつて、りよは、女性であることによって、「武家社会の約束ごと」に入ることを免れていた。そこに彼女の自由な人間性の発露が見られた。しかし今、「女性なれば別して御賞美あり」と「秩序」の側から八賞美』を受ける彼女は「武家社会の約束ごと」から自由な存在たりえなくなっている。彼女は「三右衛門の家名相統被仰付」ことによって、かつての宇平がそうであったように、外側からその生き方を規制されることになる。過去、現在、そして未来に渡る「家」の全体性に、今度は彼女が繰り込まれることになる。「追て相応の者婿養子可被仰付」とされた彼女に、脇差を「切に請う」て譲り受けたり、自分の名を願書に書き入れてもらうことを「きつと居直つて要求した」りする、はつらつとした主体的女性、りよを想像することはできない。

文吉にしても事情は同じだ。あの敵討に身命を賭して、献身的に精一杯動く一庶民文吉は、深中という小役人になることによって、権力機構の一歯車に組み込まれてしまう。「辻番組合月番西丸御小納戸……」という権力機構の一歯車に。そしてその時、文吉の、あの精彩ある面影は、もはや山番である深中に点ぜられることはないのだ。

こうして鷗外は、この敵討一件後の顛末において、個々人の人間性を埋没させてしまう、機構としての権力構造を描いているのである。

「鷗外は、権力の構造を描ききることができたただ一人の近代作家だった」

としたのは飛鳥井雅道氏だが(『季刊 日本文化』⁷ 鷗外その青春『八角川書店』、『意地』三部作において、細川忠利なり徳川家康なりという個人としての権力者を描くことに成功した鷗外は、本作品においては、幕末天保期の、そのまさに崩れゆく封建社会の中で、すでに成立している、機構としての権力構造を描いてみせたのである。そしてその中で、個々の人間性が、その個性が、埋没される様を、彼は冷静に見て

取っている。

従来から本作品を読む上でしばしば問題とされる作品末尾、屋代弘賢の賞美の歌に対して書いた「幸に太田七左衛門が死んでから十二年程立つてゐるので、もうパロディを作つて屋代を揶揄ふものもなかった」という一文も、右の事情を示唆するものではないだろうか。

「又もあらじ魂祭るてふ折に逢ひて父兄の仇討ちたぐひは」と賞美されるりよの「光栄」と同時にその「悲劇」をも鵜外は見ているに違いない。

とするならば、一度作品世界から消えたはずの宇平の存在も、彼ら「晴がましい敵討」をした者達の対局にあるものとして再び浮かび上がってくるのではあるまいか。彼の「勝手」にした行動に比して、りよらの個性を埋没させられた姿は対照的に印象づけられる。そしてそれをしいる権力構造を、鵜外は本作品において確実にとらえていている。

そして次に、揺れ動く幕末天保期、その機構としての権力構造に一人ぶつかっていった男の物語を、鵜外は引続いて書くことになる。

中斎大塩平八郎の物語だ。

注1 本作品執筆にあたって鵜外が依拠した資料に関しては、多くの鵜外歴史小説の典拠資料をつきとめられた尾形仿氏により、東京大学図書館、鵜外文庫蔵の『山本復讐記』であることが確認されている（『護持院原の敵討——その時代性について——』初出『国語と国文学』昭40・6、『森鵜外の歴史小説史料と方法』八筑摩書房／所収）。そして氏も指摘されるように、鵜外はほぼ原典の叙述に即して本物語を展開させている。

注2 「四十五歳」の九郎右衛門を、作品中で「老人」と呼んでいる三右衛門といっしょの世代に入れるのは問題があるといわれるかもしれない。しかし九郎右衛門は、作中「体は巖盤でも、年を取つてゐるので」とされているし、また次作「大塩平八郎」においては、四十五歳の平八郎について「四十五歳にしては老人らしい所が無い」という記述も見られる。九郎右衛門を三右衛門と同じ世代に含めてよいと考える一つのゆえんである。

注3 「敵討は切腹と共に武家時代の特異の風習なり」（藤岡作太郎、「平出鑑二郎著『敵討』（明42・5）に対する「序」」）

注4 「しかし、仇討の日本的特質は、その私法性にあるのではなく、逆に共同規範たる武士道との関連において示されるであろう。（紀田順一郎、「仇討の論理」、歳月社名著選刊シリーズ『敵討』（平出鑑二郎）解説）

注5 拙稿「阿部一族」論（『意地』の実体）」（『日本文学』79・11）

注6 『山本復讐記』には次のようにある。

「……元表小使相動候文吉と申もの古三右衛門とへ懇意に出入いたし居候が此義を承りともく残念に存じ三人正差添証人見知り人故何国迄も罷越本意を為遂可申と真実に申入れれば皆々大ニ歎び幸ひ此節浪人なれば宇平が家来ニ召抱へ……」

注7 「この敵討は有名なもので、写本もあり瓦板も出てゐるが……」（森潤三郎、『鵜外森林太郎』八森北書店／）。この方も当時にあつては、女性の敵討としての珍しさも手伝つて、いたく世間に喧伝されたことは、巷間数種の瓦板、落首等の流布していることをもってしてもわかる。（尾形仿、前掲論文）

注8 「如上のりよを象徴的によく表わしているのは、目を中心とした表情の描写である。（『鵜外とクラウゼキッツ』『護持院原の敵討』を中心に——『日本近代文学』第13集、昭45・10）

注9 「雁」『貳拾壹』章は、『スバル』の大正二年五月号に掲載された。

注10 「一口にいへば、宇平には、もはやかういふ『敵討』などいふ行為はつまらぬことで、どうでもよくなつてゐた。宇平は青年で、神経も織く、謂はば、『近代人』といふものに似通ふ状態になつてゐた。日本の文壇に自然主義が興つたときには、誰でも、宇平のやうな顔付をすることを誇として、それを『覚めた人』だと云つた。（『鵜外の歴史小説』初出『文学』昭11・6、『筑摩全集類聚 森鵜外全集 別巻』八筑摩書房／所収）

注11 山崎氏は、この批判をさせていない点を押さえて「宇平の造型を途中で止めてしまった所に鵜外の秩序意識が働いている」とされるが、天保期を生きた青年宇平に敵討の内実批判を求めるのは無理だろう。また、もしここで宇平がそうした批判を展開することになれば、彼はまさしく大正現代の青年と変わらなくなってしまうのではないか。天保という時代の制約の中に生き

る宇平には、当然のことながら、作者鷗外に見えているほどには敵討の実体は見えていない。しかしそれは宇平の造型を途中で止めているということではない、とわたくしは考える。

注12 「九日にはりよが旅支度にいる物を買ひに出た。」「山本方で商人に注文した、少しばかりの品物にも、思ひ掛けぬ手違が出来て、りよが幾ら氣を揉んでも、支度がなか／＼はかどらない。」

(一九八二、八、二九稿)